

# 曹氏歸義軍節度使時代の敦煌石窟と供養人像 (二)\*

赤木崇敏

## はじめに

敦煌石窟には、石窟の造営・重修に関わった人物の圖像（供養人像）が多数描かれており、そのなかには9世紀半ば～11世紀前半に敦煌を支配していた歸義軍節度使とその一族の供養人像も存在する。しかし、節度使一族の供養人像には、損傷や剥落により題記が読めなくなったために人物を特定できないものも数多くある。このような供養人像を歴史資料としてどのように活用するかが歸義軍史研究の課題の一つといえよう。

その一方で、現在でもなお判讀されていない題記も残されている。例えばこれまで莫高窟の漢文題記については、現地調査にもとづく Pelliot, *Grottes de Touen-Houang* (1908年調査、1981～1992年刊行)、謝稚柳『敦煌藝術叢録』(1942～1943年調査、1955年刊行)、史岩『敦煌石室畫象題識』(1943～1944年調査、1947年刊、)敦煌研究院(編)『敦煌莫高窟供養人題記』(1964～1982年調査、1986年刊行。以下『供養人題記』と省略)が主な史料集として使用されてきた。しかし、實はこれらの史料集でも未讀・未収録の題記が多数存在する。そのような題記は破損や退色により墨跡が見えにくくなったものがほとんどだが、現地で題記を實見すれば現在でも判讀することができる。

筆者は、このような問題意識にもとづいて2010年より敦煌石窟を調査し、題記を読み直すとともに、曹氏節度使時代(914年～11世紀前半。歴代節度使の名稱・在位年については圖1参照)の供養人像の配列秩序や圖像的特徴を明らかにし、そ

---

\*本稿のもととなった敦煌石窟の調査は、2016～2018年に敦煌研究院の許可を得て実施した。調査に際しては敦煌研究院の方々に多大な協力を頂いた。記して深謝したい。また、この石窟調査は坂尻彰宏氏(大阪大学)と共同で行っており、調査で得られた知見は同氏と共有している。ただし、本稿で示した題記録文や供養人解釈は筆者の責任によるものである。

れらをもとに従来知られていなかった12の石窟（莫高窟11窟・五个廟1窟）に曹氏節度使像もしくはその夫人像があることを本誌第10号に発表した<sup>1</sup>。

ただし前稿は調査の途中成果を公表したもので、未調査の石窟も多数残っていた。本報告は、前稿の續きとなる成果報告であり、その後の現地調査によって新たに発見した曹氏節度使・夫人像のある5窟を紹介するとともに、題記の読み直しによって明らかになった第3代節度使曹元深の婚姻関係について報告したい。

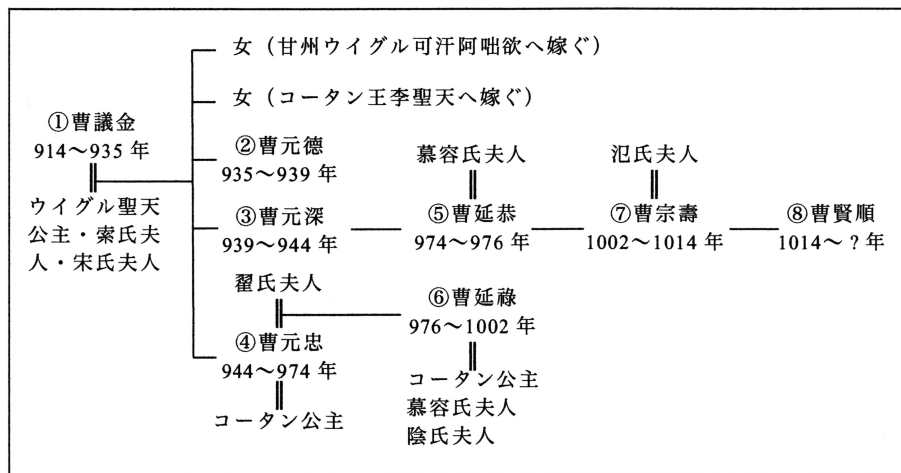


圖1 曹氏節度使系圖

①～⑧は節度使繼承順を指す。繼承順・在位年については、藤枝 1942；榮 1996；森安 2000；赤木 2017 を参照。

## 一、新発見の曹氏節度使・夫人像

題記の判讀できない供養人像は、石窟内の配置場所と装飾という2つの指標によって、それが曹氏節度使もしくはその夫人であるかどうかを特定することができる。一般に供養人像はその性別・長幼・輩行・社会的地位などの秩序に応じて、高位者から順に隊列を組んで描かれる。とくに歸義軍時代には、甬道に節度使・夫人ら高位者を描き、主室の南・北・東壁にはその家族が甬道を向くように配置された。そして、甬道の供養人像は石窟内の佛像に禮拜する形式をとっていた<sup>2</sup>。ま

<sup>1</sup>赤木 2016b 参照。同誌には坂尻彰宏も歸義軍時代の供養人像の配列秩序をもとに9世紀の節度使・索勳の供養人像について分析している〔坂尻 2016〕。なお、前稿〔赤木 2016b, 306 頁〕では莫高窟第390窟にも甬道南壁第1身に節度使像があると述べたが、再度實見したところ実際には比丘像であったため、この第390窟は除外する。

<sup>2</sup>張先堂 2008, 101-102 頁；張先堂 2011, 462 頁；赤木 2016b, 287-288 頁；坂尻 2016, 312 頁。

た、甬道南壁を上位とし、節度使像は概ね甬道南壁に描かれ、とくに第1身には當代ないし先代の節度使が置かれる<sup>3</sup>。一方の甬道北壁には、①夫人など女性親族（第1身には節度使夫人が置かれる）、②當代の節度使（この場合には甬道南壁第1身には先代の節度使が描かれる）、③夫人側の男性姻族、④造營・重修に関わった政權の幕僚ないし高僧とその男性一族、のいずれかが描かれた<sup>4</sup>。

次に装飾を見ると、曹氏時代の供養人像は、張氏時代（848年～914年）に比べて様式化されており、節度使像と夫人像の服装や敷物には以下のような特徴が窺える。節度使は三品以上の官人の服装であり（幘頭、紫色の公服<sup>5</sup>、金魚袋、朱色の革帯）、柄香爐ないし笏を持っている。また節度使の足下には花模様の縁取りの付いた正方形の敷物がある。さらにその後ろには、複数人（2～4人）の男性従者を随えており、彼らは寶刀・弓・箭囊などの武具一式や、龍ないし鳳凰の文様のあつ翳を抱えている。一方の夫人像はその出自（漢人・コータン人・ウイグル人）に応じて異なる禮服を着ている。また持ち物は柄香爐ないし香爐であることが多く、花盆や合掌の場合もある。敷物は節度使と同様に花模様の縁取りのある正方形で、2～4人の侍女を随え、彼女らは鳳凰または水鳥の紋様のあつ翳を持つほか、寶鏡・水瓶・花盆・銀蓋物などを胸に抱えている〔各部位の位置・名稱は圖2を参照〕。

また、供養人像には、その人物の氏名・官稱號などの題記を記すカルトウーシュ（榜題）が描き添えられる。曹氏節度使・夫人のカルトウーシュは1～2段の臺座が附いているほか、その上端には寶珠や房飾りの附いた上飾りがある。上飾りは社會的地位・長幼・輩行などの序列に応じて異なっており、高位者から順にA型～D型のように分類でき、甬道の節度使・夫人像はA型ないしB型の上飾りを有している〔圖3〕<sup>6</sup>。

さて、前稿〔赤木2016b〕で指摘した曹氏節度使・夫人像のある窟は計50窟（莫高窟39窟、榆林窟10窟、五个廟1窟）であったが<sup>7</sup>、その後2016～2018年に以上

<sup>3</sup>前稿〔赤木2016b, 288-289頁〕では甬道南壁は概ね節度使とその父祖・子弟など男性一族が描かれること、供養人像は高位者から順に配置されること、また第1身は必ずしも當代の節度使と限らず先代の節度使を描くケースもあることを述べた。壁面のスペースの都合で甬道南壁に先代の節度使像のみを描く場合には、當代の節度使像は主室東壁南壁（莫高窟第205窟）や甬道北壁（莫高窟第244窟）に置く例もある。また、坂尻〔2016, 312-313頁〕も、甬道南壁の第1身は當代の節度使かあるいはその父・祖父・兄などの高位の人物が描かれると指摘する。なお例外として、後述する莫高窟第397窟では、節度使像のすぐ前に花柄の服を着た男兒、すなわち節度使の息子を描き、節度使を第2身とする例がある。

<sup>4</sup>赤木2016b, 289頁；坂尻2016, 312-313頁。

<sup>5</sup>ただし、經年變化により朱色に變色しているものが多い。例えば、榆林窟第16窟や第19窟の節度使像は首回りから肩口のみが至極色（黒紫色）で、胸元から下は朱色になっている。

<sup>6</sup>以上の曹氏節度使像・夫人像・カルトウーシュの圖像的特徴については、赤木2016b, 289-293頁；坂尻2016, 320-322頁；赤木・坂尻2017, 406-407頁を参照。

<sup>7</sup>注1に述べたとおり、前稿で取りあげた莫高窟第390窟は除外している。

の指標をもとに調査を行ったところ、さらに莫高窟の5窟に節度使・夫人像があると判断した<sup>8</sup>。ただし、いずれも題記は判読できないため、節度使の名前・年代を特定するのは難しい。

#### (1) 莫高窟第180窟（曹元徳～曹元忠時代）〔圖4〕

盛唐期造営、中唐・五代・清代重修。本窟は五代期に甬道部分を重修している。『敦煌石窟内容總録』〔71頁〕には甬道北壁に五代畫女供養人頭部ありとするも、甬道南壁の供養人像については言及していない（そのほか題記史料集には甬道供養人像の情報はない）。實際、甬道南壁の壁面はほとんど剝落しているが、本來そこには供養人像が描かれていたことを示す痕跡がわずかながらも残っている。

南壁の西端（主室側）には、頭頂部に半球形の天蓋がありさらに寶珠や房飾りで裝飾されたカルトウーシュの上飾り（A型）が確認できる（上飾りから床までの高さは約156cm）。上飾りの直ぐ下には一部だけだが緑色のカルトウーシュが見えるも、題記は読めない。しかし、管見の限りでは、曹氏時代の石窟甬道においてA型の上飾りを持つ供養人像は曹氏節度使ないしその夫人しかいない<sup>9</sup>。また、上述のように曹氏時代の甬道南壁に描かれる供養人像の先頭（主室側に描かれる第1身）には當代ないし先代の節度使が置かれることがほとんどであるから、本窟の甬道南壁の西端にも曹氏節度使が描かれていた可能性が高い。また、この供養人像の頭部・衣裳・足下はまったく確認できないが、手の肌色のみが見える（柄香爐を持つために前方に突き出した手の一部かもしれない）。

一方の甬道北壁の西端には、顔そのものは消えているが、漢人女性の鳳冠・花釵、顔の兩側面の鬢、ネックレスなどが残っている。香爐も確認できるが、衣裳や敷物は現在では失われている。カルトウーシュは緑色で、甬道南壁と同じくA型

<sup>8</sup>このほか、莫高窟第185窟では甬道南壁の繪は全く残っていないが、甬道北壁は西夏時代の壁面が一部崩落して、下層の五代期の壁面が姿を現している。この甬道北壁の西端には縁取りの刺繍のある敷物（模様は確認できない）があるものの、肝心の供養人像の頭部や體は見えない。しかし東端には、朱色の公服を着て小壺を持つ男性が確認できる。莫高窟第85窟・第121窟では、節度使の従者の持物には翳や寶劍・弓・箭囊以外に小壺を持つ例も確認できるため〔赤木2016b, 295頁参照〕、この人物は節度使の従者である可能性もあるが、壁面の剝落が著しく確證に乏しいため、本稿では取りあげない。また、別稿〔赤木・坂尻2017, 479頁〕で指摘したように、榆林窟第40窟の主室甬道にも節度使像があった可能性が高いが、現在では失われている。さらに、榆林窟第38窟主室甬道にも節度使・夫人像が確認されるが、これについては坂尻氏との共著論文で詳しく論じる豫定である。

<sup>9</sup>なお例外として榆林窟第12窟甬道南壁第5身の「勅受墨離軍諸軍事知瓜州刺史檢校司空」がA型の上飾りを持っているが、この人物は節度使に代わって瓜州統治にあたった曹延祿に比定する〔赤木2016a, 14-15頁〕。

の上飾りが見えるも、臺座は消えている（上飾りから床下までの高さは約157cm）。題記は残っていないが、以上の特徴から夫人像と見て間違いない。

甬道部分が五代期重修であれば、甬道南壁の人物は曹議金（在位914～935年）・曹元徳（在位935～939年）・曹元深（在位939～944年）・曹元忠（在位944～974年）が候補となる。このうち曹議金については、彼と相對して甬道北壁第1身に描かれる女性は本窟のような漢人ではなく、正妻である甘州ウイグル聖天公主がほとんどであるため<sup>10</sup>、曹議金は除外してよい。とすれば、本窟の甬道南壁の曹氏節度使は元徳・元深・元忠のいずれかであろう<sup>11</sup>。

## （2）莫高窟第248窟（曹元徳～曹元忠時代）〔圖5〕

西魏時代造營、五代重修。『敦煌石窟内容總録』〔98頁〕は、甬道南壁に五代期男性供養人像が1身、北壁にも女性供養人像が1身ありとする（題記史料集には甬道供養人像の情報はない）。甬道南壁の供養人像は、頭頂部から床までの高さが約192cm。幘頭を被り、灰色に變色した公服を着た官人。歸義軍時代の供養人像には珍しく、頭上には黒い天蓋が描かれている<sup>12</sup>。炎をあげる寶珠が付いた柄香爐を手に行っているが、下半身や敷物は見えない。カルトウーシュは緑色で、上飾りの部分は寶珠がいくつか見えるのみで形式は不明。また2段の臺座が付いている。

甬道北壁の供養人像は、頭頂部から床まで約195cm。漢人女性の衣裳で、鳳冠を被り、2對の花釵がある。下半身は完全に剝落しているが、胸元には2重にしたネックレスがあり、手には炎をあげて燃える寶珠の付いた香爐を持っていることがわかる。カルトウーシュは緑色で、上飾り・臺座ともに剝落していて不明。

ともに題記は讀めないが、衣裳や持ち物（柄香爐・香爐）から、この2人は節度使・夫人像の可能性が高い。また甬道が五代期重修であるため、先の莫高窟第180窟と同じく曹元徳・曹元深・曹元忠のいずれかとその妻であろう。

<sup>10</sup>莫高窟第55窟・第98窟・第100窟・第108窟・第121窟・第205窟・第401窟・第428窟、榆林窟第16窟。例外は榆林窟第6窟上層で、甬道北壁第1身にはコータン公主が描かれているが、これは南壁第2身の曹延祿の正妻であろう。赤木2016b, 298-299, 301-302頁；坂尻2016, 314-315頁を参照。

<sup>11</sup>元深の配偶者については本稿第2節を参照。また曹元忠については、ソグド系の翟氏夫人とコータン公主の2人を娶っていたことが明らかになっている〔榮2001, 69頁；赤木2017, 243-248頁〕。翟氏夫人像については、莫高窟第5窟・第61窟・第79窟・第126窟・第203窟・第231窟・第427窟・第437窟、榆林窟第19窟・第25窟・第33窟・第34窟・第36窟に翟氏夫人が確認できる。一方、コータン公主像は第202窟甬道南壁第2身の供養人像がそれにあたる可能性がある。赤木2016b, 298, 300, 303-304頁；坂尻2016, 314-315頁；赤木2017, 260頁（注44）を参照。

<sup>12</sup>このほかの例としては、莫高窟第156窟甬道南壁第1身の張議潮像や第98窟東壁南側第1身のコータン王李聖天像も頭上に天蓋が描かれている。

### (3) 莫高窟第334窟（曹元徳～曹元忠時代）〔圖6〕

初唐造營、五代・清代重修。本窟は甬道部分が五代に作り直されている。既刊の題記史料集は言及していないが、甬道南壁に男性供養人像2身と従者、北壁に漢人女性2身と侍女が描かれている。

甬道南壁第1身は頭頂部から床までの高さは約186cm。朱色の公服で、手には柄香爐を持ち、帯には魚袋を下げている。カルトウーシュは緑色で房飾りの付いた上飾りが確認できるが、損傷により詳しい形状は不明。またカルトウーシュには2段の臺座がある。足下には花模様の敷物があり、黒地の花模様の縁取りが付いている。題記はカルトウーシュ末端に文字の痕跡が見えるも判讀できない。

南壁第2身は頭頂部から床までの高さは約177cm。朱色の公服で、手には笏を持ち、帯には魚袋を下げている。カルトウーシュは緑色で、上端には房飾りが付いているがやはり損傷により形状は不明。カルトウーシュの下端ははっきりとは見えず、臺座の有無は確認できない。敷物は花模様で、同じく花模様の縁取りがある。カルトウーシュに文字の痕跡はない。

第2身の背後（東側）には、翳や箭囊、それに刀の柄と思しきものが見える。翳や寶刀・弓・箭囊は節度使に随従する従者がほぼ必ず手にしているもので、ここには従者が描かれていたと思われる。この従者の存在のほかに上述の服装やカルトウーシュの飾りから推して、第1身は曹氏節度使と見て良い。第2身はその子弟と思われる。

甬道北壁第1身は、頭頂部から床までの高さは約188cm。朱色の漢人女性の衣裳を纏い、鳳冠を被り、手には上部に寶珠の付いた香爐を持つ。カルトウーシュは緑色で、半球形の天蓋、寶珠、房飾りの付いた上飾り（A型）があり、臺座は2段。足下には花模様の敷物があり、黒地の花模様の縁取りがある。カルトウーシュの上部には數文字分の文字の痕跡があるも、判讀できない。

北壁第2身は頭頂部から床までの高さは約187cm。彼女も漢人女性の衣裳で鳳冠を被るが、服の色はかなり色褪せていてショールなどの文様は不明。手には花盆を持つ。カルトウーシュは緑色だが、上飾りや臺座は不明。足下は剥落しており、敷物は不明。

この第2身の背後（東側）には、人物の姿形は見えないが鳥の文様の翳があるため、侍女がいたと思われる。侍女の存在に加え、衣裳やカルトウーシュの装飾から、第1身の女性は節度使夫人であったと推測しうる。第2身の女性は節度使の妻子ないし甬道南壁第2身の妻かもしれない。本窟も甬道が五代期重修のため、南北壁のそれぞれ第1身は曹元徳・曹元深・曹元忠のいずれかとその妻であると思われるが、題記が讀めないため特定できない。

#### (4) 莫高窟第 169 窟 (曹元忠時代以降) [圖 7]

唐代造營、宋・清代重修。『敦煌石窟内容總錄』[67 頁] は甬道北壁に宋代の女性供養人像 1 身の一部があるとし、南壁については情報を載せていない(題記史料集にも情報はない)。しかし實見したところ、甬道南壁には男性供養人像 3 身(ないし 2 身と従者 1 身)、北壁には女性供養人が 2 身確認できる。

甬道南壁は剝落が著しく、ほとんど壁面が残っていない。ただし、西寄りの主室側には、襟元の一部と魚袋が見えており、第 1 身として男性官人が描かれていたことがわかる。カルトウーシュもほとんど姿をとどめておらず、壁面の下部にわずかに緑色の顔料が残っているところがあり、これがカルトウーシュの一部と思われる。この襟元や魚袋の後方(東側)、床からの高さ約 143cm のところに緑色の顔料が残っており、これが第 2 身のカルトウーシュであろう。残念ながら文字の痕跡は確認できず、また上飾りや臺座も見えない。さらに南壁の東端、床から約 80cm の高さのところには朱色の花模様が見えており、これは幼児もしくは従者の衣服の一部と思われる。

一方、甬道北壁の第 1 身には鳳冠を被り、漢人女性の衣裳を纏い、寶珠の付いた香爐を持っている女性像が残っている。退色のため衣裳の色は不明。カルトウーシュと臺座は失われているが、寶珠や房飾りの付いた上飾りのみが残っており、形状から B 型と思われる(上飾りから床までの高さは約 156cm)。壁面剝落のため、足下や敷物は確認できない。また、第 2 身にも漢人女性の頭部やネックレスが残っており、やはり寶珠付きの香爐を持っている。この女性もカルトウーシュの上飾りのみ残っており、寶珠や房飾りは見えないが天蓋が 2 段になっているため豪華な装飾であったことが推測される。持ち物(香爐)やカルトウーシュの装飾、甬道の配置から推して、北壁第 1 身の女性は節度使夫人であった可能性がある。とすれば、南壁第 1 身には節度使が描かれていたのであろう。甬道は宋代重修であるから、曹元忠以降の節度使と思われるが、残念ながら決め手を缺く。

#### (5) 莫高窟第 260 窟 (曹元忠時代以降) [圖 8]

北魏時代造營、宋代重修。本窟は北魏窟の東壁を宋代に改修して甬道を新しく設けている。『敦煌石窟内容總錄』[105 頁] には甬道南北壁に宋代の男女供養人像ありとするが、現存するカルトウーシュの數から推して、甬道南壁には 3 身、北壁には 2 身以上の供養人像があったと思われる。なお、既刊の題記史料集には供養人像の情報は全くない。

南壁の第 1 身は、幘頭、朱色の公服、手には柄香爐を持ち、節度使としての特

徴を備えている（ただし魚袋や笏は確認できない）。頭頂部から床までの高さは約162cm。カルトウーシュは緑色で、半球形の天蓋・寶珠・房飾りの付いた上飾り（A型）があり、臺座は2段。足下の敷物は見えない。第2身は朱色の公服のみ見えるが、上半身は剥落している。カルトウーシュは緑色で、半球形の天蓋は確認できないがA型ないしB型の上飾りがあり、2段の臺座がある。第3身は上飾り・臺座の無い短い緑色のカルトウーシュのみ残っており、像そのものは確認できない。いずれも題記は読めないが、南壁第1身の圖像的特徴から、南壁には節度使とその子弟が描かれていた可能性が高い。宋代重修ということから、この節度使も曹元忠以降の人物と思われるが、特定できない。

一方の北壁の第1身は壁面のほとんどが剥落しており、足下の赤い敷物のみ見える（ただし損傷により模様は確認できない）。カルトウーシュは完全に剥落しており残っていない。第2身は女性衣裳の襟元と裾のみが残っており、花盆を持っている。カルトウーシュは緑色で、上飾りは剥落しており、1段の臺座があるように見える。この第2身の後ろ（東側）は壁面の損傷が著しく、供養人像の痕跡は無い。第2身に女性が描かれていることから、この北壁の第1身には節度使夫人が描かれていたと思われる。

なお、『敦煌石窟内容總録』には中心塔の東面下部に宋代男性供養人像が1列ありとするが、実際には東面の南側に比丘もしくは比丘尼が6身（南端の2人は像そのものは見えずカルトウーシュのみ確認できる）、北側に女性5人と性別・容姿のはっきりしない供養人像1身がある。また『敦煌石窟内容總録』には、東壁南側にも文殊變と供養人像があるというが、現在はカルトウーシュの上飾りが4つ残っているのみで、像そのものは確認できなかった。

## 二、曹元深の婚姻關係

曹氏節度使の系圖・婚姻關係の分析は、歸義軍史そのものの復元となるだけでなく、日付の無い敦煌文獻や石窟題記の年代を判定する指標ともなり、これまでに多くの研究者によって進められてきた。ただし、曹元徳・曹元深・曹延恭・曹宗壽・曹賢順らは在位期間も短くまた同時代史料も數量に限られるために、彼らの血縁・婚姻關係についてはなおも未解決の問題が残されている。例えば曹延恭の血縁關係もそのひとつであり、彼が曹元徳・曹元深・曹元忠のいずれの子であるか長年に亙る議論があったが<sup>13</sup>、近年筆者は莫高窟第205窟主室の供養人像をも

<sup>13</sup>藤枝1942, 64, 67頁；姜1987, 964, 967頁；藤枝1977, 66頁；森安1980, 319頁（森安2015, 316頁）；森安2000, 49頁など。



とに、曹延恭の實父は曹元深であることを論じた<sup>14</sup>。

それでは、曹延恭の實母、すなわち曹元深の配偶者は誰であろうか。政權の安定や東西交易路の維持のために、敦煌の有力氏族や甘州ウイグル王國・コータン王國の王家と重層的な婚姻關係を結んできた曹氏一族だが、元深についてはその妻の民族さえ分かっていない。ただ姜亮夫は、莫高窟や榆林窟における曹氏女性供養人像の列においては、先頭に曹議金の3人の妻が並びその次に「譙郡夫人（譙縣夫人）」が2人いるとし、このうち1人が曹元徳の妻、もう1人が曹元深の妻と推測しているが、これを裏付ける確實な史料は見つかっていない<sup>15</sup>。そこで本節では、近年新たに発見された、この問題に関連する供養人像や題記を取りあげたい。

莫高窟第397窟は甬道南壁に2身の男性供養人像と従者<sup>16</sup>、甬道北壁にも2身の女性供養人像と侍女がいる〔圖9〕。本窟は前稿<sup>17</sup>でも取り上げているが、改めて供養人像の特徴を描寫すると、甬道南壁の第1身は頭頂部から床までの高さは約127 cm、朱色の花模様の服を着た男兒で、第2身の男性に並びそうように立っている。カルトウーシュは緑色で、上飾りや臺座はない。題記の冒頭1文字目には「男」とあるが、その下に文字の痕跡は確認できない。

第2身は上半身が剥落しており、朱色の公服の裾しか残っていないが、痕跡から推測するに頭頂部から床までの高さは185 cm近くあったと思われる。花模様の縁取りのある敷物の上に立っており、カルトウーシュは緑色で、頭頂部に半球形の天蓋が付き寶珠や房飾りで裝飾された上飾り（A型）があり、2段の臺座が付いている。これらの裝飾から、南壁第2身が曹氏節度使であることは疑いない。この人物の題記は2行で左行始まりだが、*Grottes de Touen-Houang*；史1947；謝1955；『供養人題記』などこれまでの史料集では判讀されていない。前稿では

推誠奉國保塞功臣歸……

……食實……

と読み、「推誠奉國保塞功臣」という功臣號はこれまで曹元忠と曹延祿しか名乗っていないことから、この第2身は兩名のうちいずれかであろうと推測した。しか

<sup>14</sup>赤木2017, 240-243頁。

<sup>15</sup>姜1987, 961-962, 965, 974頁。姜亮夫が言及する2人の「譙郡夫人（譙縣夫人）」とは莫高窟第61窟東壁北側の第10身・第11身のことと思われるが、実際にはそれぞれ慕容氏と閻氏に嫁いだことが題記から判明するため、姜説はなりたたない。また一方で姜亮夫は、別な箇所曹元徳の妻を索氏としている〔同964, 974頁〕。

<sup>16</sup>前稿〔赤木2016b, 302頁〕では甬道南壁の供養人像は計3身としたが、第2身曹元深の後に続く緑色の服を着た人物は（頭部は確認できない）カルトウーシュが見当たらず、また背後に箭囊や翳の一部、花模様の包みと思しきものが見えるため、従者の1人であろう。従者の持ち物の數や壁面のスペースを勘案すると、従者は2~3身あったと思われる。

<sup>17</sup>赤木2016b, 302頁。

し、その後の再調査によって、この題記を

……推誠奉國保塞功臣歸義軍……

…………師兼中書令譙郡開國公……□阡□伯戶食□□伯□□元深<sup>(實?)</sup>

と読み直し、第2身は曹元深であることが判明した<sup>18</sup>。また、敦煌石窟においては節度使の男兒は父である節度使のすぐ後ろあるいは前に配置され、かつ同じ敷物の上に立って描かれることが多いため<sup>19</sup>、第1身の男兒像は彼の息子曹延恭であることがわかる。

一方、甬道北壁の第1身は頭頂部から床までの高さは約182cm。漢人女性の衣裳を纏っており、頭部はほとんど残っていないが右側の簪が一部見える。また、手には香爐を持っている。カルトウーシュは緑色で、南壁第2身曹元深と同じく半球形の天蓋や寶珠・房飾りで裝飾された上飾り(A型)が付いているが、壁面の下部は剥落しておりカルトウーシュの臺座や供養人像の足下は確認できない。敷物は花模様で、同じく花模様の縁取りが付いている。

第2身の女性も漢人女性の衣裳で、花冠と思しきものを被り、花模様のショールを着けている。カルトウーシュは緑色で、天蓋は無いが寶珠や房飾りのある上飾り(B型)がある。壁面の損傷によりはっきりとは見えないが、少なくとも1段の臺座がある。手元もよく見えず、彼女の持ち物は確認できない。第1身とは別の花模様の敷物の上に立っており、同じく花模様の縁取りが付いている。また、この第2身の背後には花柄の翳の一部が見えていることから、現在ではその姿は見えないが、侍女が描かれていたと思われる。

北壁の女性供養人像の題記はどちらも判讀できないが、第1身の女性はその裝飾や配置から節度使夫人と見て間違いない。また、曹元深の實母は甘州ウイグル聖天公主と考えられるため<sup>20</sup>、漢人の衣裳を纏うこの女性像は元深の妻と見てよからう。したがって、元深の配偶者は漢人もしくはソグド系翟氏か吐谷渾系慕容氏<sup>21</sup>であったことがわかる。

<sup>18</sup>2行目の「…師」とは「太師」のことであろう。節度使の持つ官稱號については榮新江による詳細な研究[榮1996]があるも、曹元深が太子や中書令といった稱號を有していた事實はこれまでに知られていない。また従来、「推誠奉國保塞功臣」は曹元忠や曹延祿の供養人題記に現れることが確認されてはいるが、本稿で紹介した莫高窟第397窟や第444窟(後述)の事例から、この功臣號は曹元深・曹元忠・曹延恭・曹延祿の4人が有していたことが判明する。曹元深の事績や歸義軍節度使の功臣號については、第397窟・第444窟以外にも新出史料があり、稿を改めて論じたい。

<sup>19</sup>節度使男兒像の配置、また曹元深と曹延恭の父子關係については、赤木2017, 240-243頁を参照。

<sup>20</sup>Akagi 2012, pp. 8-10; 馮 2013, 312-313頁; 赤木 2017, 238頁。

<sup>21</sup>曹元忠夫人のソグド系翟氏(莫高窟第61窟南壁第3身・榆林窟第19窟主室甬道北壁第1身など)や曹延恭夫人・曹延祿夫人の吐谷渾系慕容氏(莫高窟第454窟南壁第4身・榆林窟第35窟主室甬道北壁第2身など)も漢人女性の禮服を纏った姿で描かれる。

さらに、曹元深の妻については、莫高窟第 454 窟からより詳しい情報が得られる。第 454 窟は曹延恭が造営に着手し、その死後に曹延祿の手によって完成した大窟である [圖 10]。甬道南壁には歴代の節度使像が並び、第 5 身には

窟主勅歸義軍節度瓜沙等州觀察處置管内營<sub>田</sub>押蕃落等使<sub>□□</sub>中書令譙郡開國公食邑一千五百戸食實封五百戸延恭一心供養<sup>22</sup>

とあって、窟主が曹延恭であることがわかる。この窟の主室には、東壁南側第 1 身のコータン王と東壁北側第 4 身のウイグル王子を除いて、東・南・北壁に延恭の女性親族 44 身が配置されているが、これまでに題記が判読されているのは南壁第 4 身の「窟主勅授清河郡夫人慕容氏一心供養」のみであった<sup>23</sup>。しかし近年郭俊葉により、南壁第 1～3 身の題記が新たに判読されている<sup>24</sup>。

第 1 身：姑譙郡夫人曹氏……

第 2 身：故慈母勅授太原郡夫人閻氏一心供養

第 3 身：慈母……

郭は莫高窟第 55 窟・第 61 窟・第 98 窟・第 108 窟・第 256 窟、そして榆林窟第 12 窟の題記との比較から、この第 1 身を曹議金の娘（第十六娘子）で慕容氏に嫁いだ曹延恭の姑母、第 2 身の「故慈母勅授太原郡夫人閻氏」を曹延恭の母としている（第 3 身については人物を特定していない）。

一般に、供養人像の冒頭に記される親族表記は窟主を中心としているから、第 2 身・第 3 身の 2 人の「慈母」は窟主・曹延恭の母にあたる。したがって、曹延恭の父である曹元深には少なくとも 2 人の妻がいたことがわかる<sup>25</sup>。

また、既に郭が指摘しているが、このうち第 2 身の慈母閻氏夫人は、曹元忠が造営した莫高窟第 61 窟にも見えている [圖 11]。この第 61 窟の主室には元忠の女性血縁者の供養人像が東・南・北壁に配置されているが、その北壁第 8 身の漢人女性の題記を『供養人題記』[24 頁] は

□勅受太原郡夫人閻氏一心供養

<sup>22</sup>この題記は『供養人題記』171 頁に移録されているが、調査にもとづき一部を改めている。

<sup>23</sup>史 1947, 70 頁；謝 1955, 304 頁；『供養人題記』172 頁；*Grottes de Touen-Houang* 4, p. 33.

<sup>24</sup>郭 2016, 52-59 頁。なお、筆者もこの題記を實見したが、第 1 身の「姑」や第 3 身の題記は判読できなかった。

<sup>25</sup>なお、郭は曹延恭を曹元徳の子とする舊説を採用し、第 2 身の閻氏夫人を曹元徳の妻と見なししているが [郭 2016, 59 頁]、拙稿で明らかにしたように曹延恭の實父は曹元深であるため、郭説には従えない。

と判讀し、郭俊葉もこの讀みに従っている<sup>26</sup>。かつて賀世哲・孫修身はこの閻氏を曹元忠の兄である元徳または元深の未亡人とし、一方で土肥義和や筆者は元忠の配偶者と推測した<sup>27</sup>。しかし坂尻彰宏は冒頭1文字目を「嫂（あによめ）」であることを發見し、筆者もその讀みが確實であることを同氏とともに現地で確認した<sup>28</sup>。これにより、この「太原郡夫人閻氏」は窟主である曹元忠から見て「嫂」すなわち曹元徳ないし曹元深の配偶者であること、また賀世哲・孫修身の推測が正しかったことが判明した。そして、上述の第454窟主室南壁第2身の題記と考え合わせれば、この第61窟の閻氏夫人は曹元深の妻と見るべきであろう。

ただし、この閻氏夫人が曹延恭の生母とは即斷できない。第454窟南壁第2身の題記に見える「慈母」とは實母に對する敬稱だけでなく、父の側妻で自身の養育にあたった女性をも指す。さらに郭俊葉は、第2身の題記には節度使の母親に對する封號である「太夫人」がないため、この女性は延恭の生母ではないとも指摘する。とすれば、第454窟の第3身の「慈母」が曹延恭の生母であった可能性がある。

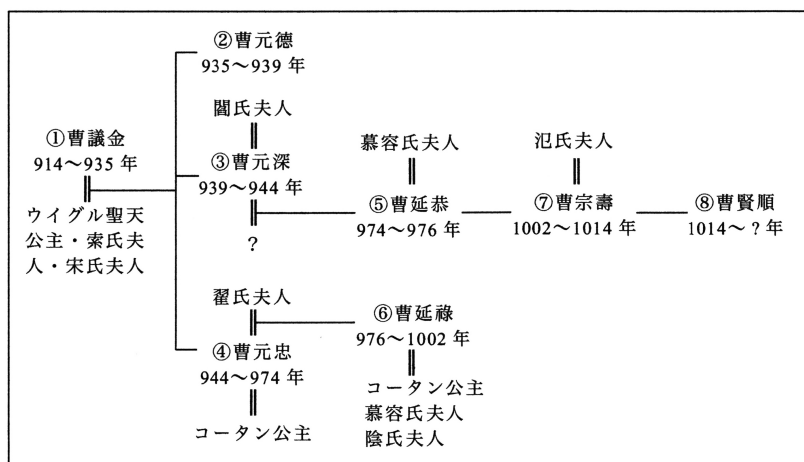


圖 12 曹氏系圖復元圖

以上をまとめると、曹元深をめぐる血縁・婚姻關係は上掲圖12のように復元できよう。さらに、この系圖を踏まえて曹氏時代の供養人像を見渡せば、莫高窟第

<sup>26</sup> 『供養人題記』24頁；郭2016, 54頁（注1）, 58頁。なお、*Grottes de Touen-Houang*；史1947；謝1955は移録していない。

<sup>27</sup> 賀・孫1982, 253頁；土肥1992, 438-439頁；赤木2013b, 116頁（注27）。なお賀1986, 227頁では、元徳の兄弟のうちいずれかの妻とするも、特定していない。

<sup>28</sup> 坂尻氏はこの發見を本稿で發表することを快く許可して下さった。ここに記して深謝の意を表したい。

444 窟甬道北壁の供養人像も曹元深夫人と思われる。本窟は盛唐時代の造営だが、前室の窟檐を宋代に増築しており、その梁には

維大宋開寶九年歲次丙子正月戊辰朔七日甲戌 勅歸義軍節度瓜沙等州  
觀察處置管内營押蕃等使特進檢校太傅兼中書令譙郡開國公食邑一千五  
百戶食實封三百戶曹延恭之世創建記<sup>29</sup>

との題記がある。また甬道も宋代に重修しており、南壁に男性供養人像2身と従者（人数不明）、北壁に女性供養人像2身と侍女（人数不明）がある [圖 13]。甬道南壁第1身は幘頭を被り、朱色の公服を纏い、帯には魚袋を下げ、柄香爐を持っている。また、カルトウーシュは緑色で、半球形の天蓋、寶珠、房飾りの付いた上飾り（A型）があり（臺座や敷物は確認できない）、曹氏節度使としての特徴を備えている。また、これまでの史料集はいずれもこの供養人像の題記を判讀していないが、實見したところ文字の痕跡が残っており、次のように判讀できる。

<sup>(推)(誠)</sup>  
𠄎□□奉國保塞功臣……

「推誠奉國保塞功臣」とは曹元深（前述の莫高窟第397窟）や曹元忠（莫高窟第5窟・第55窟・第79窟・第454窟、榆林窟第19窟・第33窟・第34窟・第36窟）、曹延祿（莫高窟第449窟）ら節度使の題記に現れる功臣號であり、この人物も節度使であることを示している。

『敦煌石室内容綜録』[183頁]は南壁供養人像を曹延恭と曹延祿が、北壁に慕容氏夫人がいるとする。假に窟檐の造営と甬道の重修が同時期に行われたものとするならば、節度使が配置されるべき甬道北壁第1身には、窟檐に創建者として名を残している節度使・曹延恭が描かれていたはずである<sup>30</sup>。

さて、相對する甬道北壁の女性供養人像2身は、どちらも朱色の漢人女性の衣裳を纏い、手には寶珠の付いた香爐を持ち、緑色のカルトウーシュの上部には、南壁第1身と同じくA型の上飾りがあり、節度使夫人としての特徴が認められる。さらに、これら供養人の題記も以下のように讀める。

<sup>(受または授)</sup>  
第1身：□慈母𠄎□ ……  
第2身：𠄎……

<sup>29</sup> 『供養人題記』168頁。なお實見にもとづき録文を一部改めている。

<sup>30</sup> なお、南壁第2身も幘頭を被り朱色の公服を纏い腰帯には魚袋を下げているが、手には笏を持ち、緑色のカルトウーシュの上飾りは半球形の天蓋の無いB型となっている。この人物の題記は判讀できないため、曹延祿と斷定するのは困難である。

第1身の題記には「慈母」とあり、さらに漢人女性の衣裳を纏っているため、南壁第1身を曹延恭とすればこの人物が延恭の實母で曹元深の妻にあたろう。そうであれば、同じく節度使夫人としての特徴を備える北壁第2身は延恭の妻・慕容氏夫人と思われる。

## おわりに

本稿では、近年の莫高窟調査で新たに発見した曹氏節度使および夫人の供養人像（第180窟・第248窟・第334窟・第169窟・第260窟）を紹介するとともに、これまで特定されていなかった曹元深の夫人像が莫高窟第397窟・第454窟・第61窟・第444窟にあることを指摘した。

筆者のこれまで調査により、曹氏節度使・夫人像のある石窟は、莫高窟44窟・榆林窟11窟<sup>31</sup>・五个廟1窟の計56窟を数える。これらは、曹氏一族だけでなくその姻族や政權の幕僚、教團の僧官らが石窟を造営・重修した際に描かれたものである。今後は、このような窟の分析を通じて、敦煌石窟のより詳しい造営史を復元するだけでなく、曹氏一族の奉佛活動の様相や、敦煌社會の上層を形成した諸集團との関係を明らかにすることが課題となろう。

また曹元深と閻氏夫人の婚姻關係は、曹氏節度使の系圖研究を一步押し進めるだけではない。閻姓の人物は10世紀の敦煌文獻や石窟題記にしばしば現れるものの、従来は單に敦煌の有力氏族のひとつとして認識されるのみであった。曹氏節度使は、敦煌内外の胡漢大族との婚姻を通じて政權の安定化を圖っていたが<sup>32</sup>、閻氏もまた姻族として看過しえない集團であったといえよう。今後は、彼らを曹氏節度使の姻族として捉えなおすことで、敦煌の社會や政權における閻氏集團の役割をより詳細に分析することが期待される。

ただし、筆者は曹氏時代の敦煌石窟の悉皆調査をまだ終えておらず、今後も新たな節度使・夫人像や題記が発見される可能性がある。以上に掲げた諸課題については、さらなる石窟調査を踏まえて別の機會に論じたい。

## 略號

*Grottes de Touen-Houang* = Paul Pelliot (et al.), *Grottes de Touen-Houang: carnet de notes de Paul Pelliot: inscriptions et peintures murales*, 6 vols., Paris : Collège de

<sup>31</sup>注8で述べた榆林窟第38窟を含む。

<sup>32</sup>榮 1996, 242 頁；馮 2013, 259-265 頁。また歸義軍節度使に關係のあった有力氏族や名族については、土肥 1980, 254-257 頁；土肥 1992, 430-439 頁；饒 1994, 1-56 頁；赤木 2013a, 251-253 頁も参照。

France Instituts d'Asie, Centre de Recherche sur l'Asie Centrale et la Haute Asie, 1981-1992.

- 『供養人題記』＝敦煌研究院(編)『敦煌莫高窟供養人題記』文物出版社, 1986.  
『中國石窟 安西榆林窟』＝敦煌研究院(編)『中國石窟 安西榆林窟』平凡社, 1990.  
『敦煌石窟内容總錄』＝敦煌研究院(編)『敦煌石窟内容總錄』文物出版社, 1996.  
『莫高窟形』＝石璋如『莫高窟形』全3卷, 中央研究院歷史語言研究所, 1996.  
『莫高窟第六一窟』＝岡田健・劉永增(編)『敦煌石窟 10 莫高窟第六一窟』文化學園・文化出版局, 2002.

### 参考文献 (ABC 順)

- Takatoshi Akagi 2012 “The Genealogy of the Military Commanders of the Guiyijun from Cao Family,” In I. Popova and Liu Yi (eds.), *Dunhuang Studies: Prospects and Problems for the Coming Second Century of Research* [敦煌學: 第二個百年的研究視角與問題], St. Petersburg: Slavia Publishers, pp. 8-13.
- 赤木崇敏 2013a 「甲午年五月十五日陰家婢子小娘子榮進客目」『敦煌寫本研究年報』7, 241-266 頁.
- 赤木崇敏 2013b 「10世紀コータンの王統・年号問題の新史料——敦煌秘笈 羽686——」『内陸アジア言語の研究』28, 101-128 頁.
- 赤木崇敏 2016a 「曹氏歸義軍時代の瓜州オアシスの統治権——瓜州オアシスからの陳情書 P.ch.2943——」坂尻彰宏(編)『出土文字資料と現地調査からみた河西回廊オアシス地域の歴史的構造』(平成25~27年度科学研究費補助金成果報告書)大阪大學, 1-24 頁.
- 赤木崇敏 2016b 「曹氏歸義軍節度使時代の敦煌石窟と供養人像」『敦煌寫本研究年報』10, 285-308 頁.
- 赤木崇敏 2017 「曹氏歸義軍節度使系譜攷——2つの家系から見た10~11世紀の敦煌史」土肥義和・氣賀澤保規(編)『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』東洋文庫, 237-261, 482-483 頁. [中文譯: 馮培紅譯「曹氏歸義軍節度使系譜考——兩支譜系所見10—11世紀的敦煌史」『絲路文明』3, 2018, 111-136 頁]
- 赤木崇敏・坂尻彰宏 2017 「榆林窟供養人敍錄選注」松井太・荒川愼太郎(編)『敦煌石窟多言語資料集成』東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所, 403-481 頁.
- 土肥義和 1980 「歸義軍(唐後期・五代・宋初)時代」榎一雄(編)『講座敦煌2 敦煌の歴史』大東出版社, 233-296 頁.

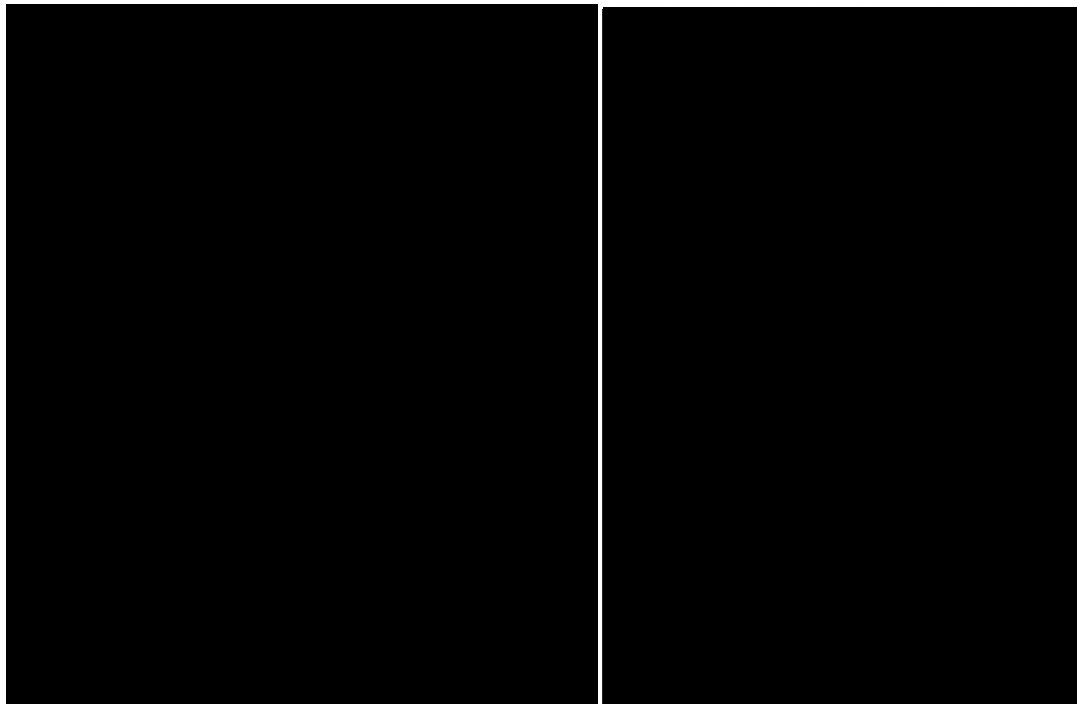
- 土肥義和 1992 「九・十世紀の敦煌莫高窟を支えた人々——敦煌研究院編『莫高窟供養人題記』の數量的分析——」唐代史研究會(編)『中國の都市と農村』汲古書院, 425-446 頁.
- 馮培紅 2013 『敦煌的歸義軍時代』(敦煌講座書系)甘肅教育出版社.
- 藤枝晃 1942 「沙州歸義軍節度使始末(三)」『東方學報(京都)』13-1, 63-95 頁.
- 藤枝晃 1977 「敦煌オアシスと千佛洞」『旅する佛たち——敦煌・シルクロード』(毎日グラフ別冊)毎日新聞社, 63-67 頁.
- 郭俊葉 2016 『敦煌莫高窟 454 窟研究』(敦煌與絲綢之路石窟藝術叢書)甘肅教育出版社.
- 賀世哲 1986 「從供養人題記看莫高窟部分洞窟的營建年代」敦煌研究院(編)『敦煌莫高窟供養人題記』文物出版社, 194-236 頁.
- 賀世哲・孫修身 1982 「瓜沙曹氏與敦煌莫高窟」敦煌文物研究所(編)『敦煌研究文集』甘肅人民出版社, 220-272 頁.
- 姜亮夫 1987 『敦煌學論文集』上海古籍出版社.
- 森安孝夫 1980 「ウイグルと敦煌」榎一雄(編)『講座敦煌 2 敦煌の歴史』大東出版社, 297-338 頁.
- 森安孝夫 2000 「河西歸義軍節度使の朱印とその編年」『内陸アジア言語の研究』15, 1-121 頁, 15 pls., 1 table.
- 森安孝夫 2015 『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大學出版會.
- 饒宗頤(主編) 1994 『敦煌逸眞讚校錄并研究』新文豐出版.
- 榮新江 1996 『歸義軍史研究——唐宋時代敦煌歷史考索』上海古籍出版社.
- 榮新江 2001 「敦煌歸義軍曹氏統治者爲粟特后裔說」『歷史研究』1, 65-72 頁.
- 坂尻彰宏 2016 「三つの索動像——供養人像からみた歸義軍史」『敦煌寫本研究年報』10, 309-325 頁.
- 史岩 1947 『敦煌石室畫象題識』比較文化研究所・國立敦煌藝術研究所・華西大學博物館.
- 謝稚柳 1955 『敦煌藝術叢錄』上海出版公司〔再版：上海古籍出版社, 1996〕.
- 張先堂 2008 「莫高窟供養人畫像的發展演變——以佛教史考察爲中心」『敦煌學輯刊』2008-4, 93-103 頁.
- 張先堂 2011 「晚唐至宋初敦煌地方長官在石窟供養人畫像中的地位」樊錦詩・榮新江・林世田(編)『敦煌文獻・考古・藝術綜合研究——紀念向達先生誕辰 110 周年國際學術研討會論文集』中華書局, 455-465 頁.

〔本研究は JSPS 科研費 JP16K03083, JP17H02401 の助成を受けたものである〕





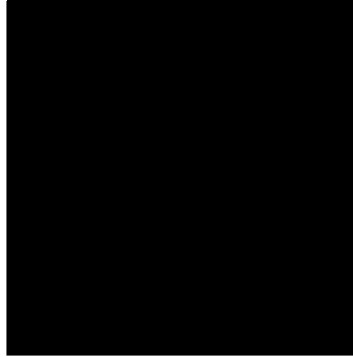
榆林窟第 19 窟甬道北壁・南壁 [『中國石窟 安西榆林窟』圖 62, 63]



莫高窟第 61 窟東壁南側第 1~3 身  
[『莫高窟第六一窟』圖 96]

榆林窟第 16 窟甬道南壁  
[『中國石窟 安西榆林窟』圖 58]

圖 2 供養人像の各部位・服飾の名稱



A 型（榆林窟第 19 窟甬道北壁第 1 身）  
カルトウーシュ上部に 3 段重ねの天蓋。頭頂部の天蓋は半球形を爲し、その頂點に 1 つ、天蓋の中段に 4～5 つの炎を出す寶珠がある。中段から 4 本の房飾りが垂れている [『中國石窟 安西榆林窟』圖 62]。



B 型（榆林窟第 16 窟甬道南壁第 1 身）  
頭頂部に半球形の天蓋は無いが、A 型と同じ数の寶珠と房飾りがある（ただしこの寫眞では左端の寶珠と房飾りが寫っていない） [『中國石窟 安西榆林窟』圖 58]。



C 型（莫高窟第 61 窟主室東壁南側第 2 身）  
天蓋は 1 段しかない。炎を放つ寶珠の数は 5 つだが、房飾りは兩端に 2 本のみ [『莫高窟第六一窟』圖 96]。



D 型（莫高窟第 61 窟主室東壁北側第 9 身）  
天蓋は C 型と同じく 1 段だが、寶珠は 3 つ、房飾りもより簡素なものが 2 本となる [『莫高窟第六一窟』圖 95]。

圖 3 カルトウーシュの分類

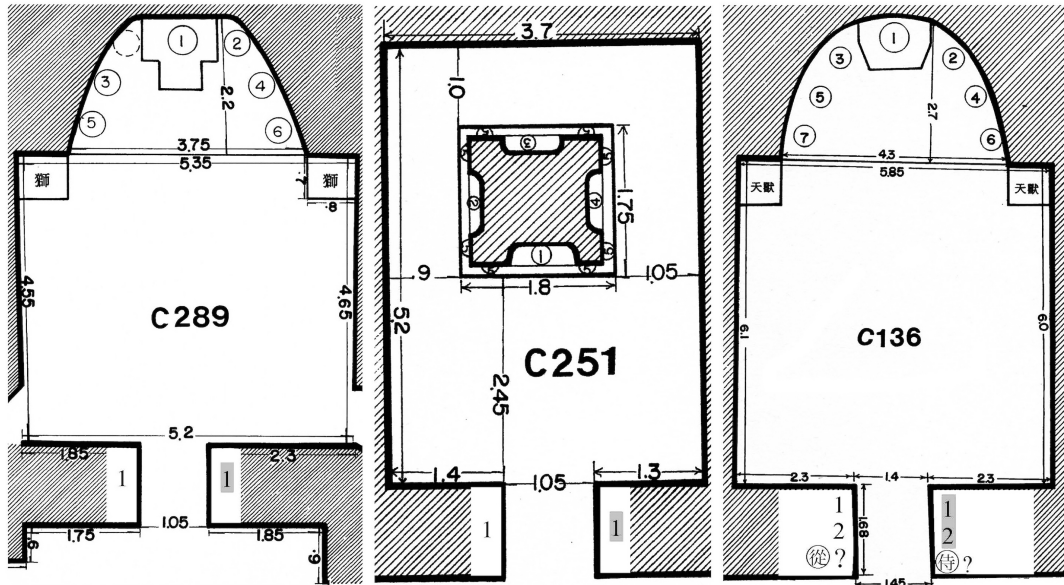


圖4 第180窟見取圖 圖5 第248窟見取圖 圖6 第334窟見取圖

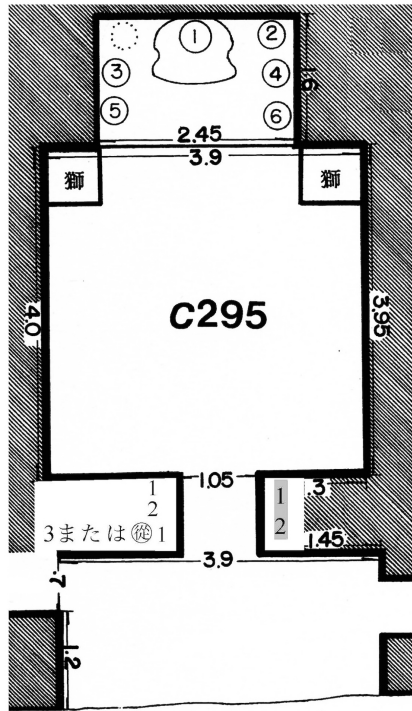


圖7 第169窟見取圖

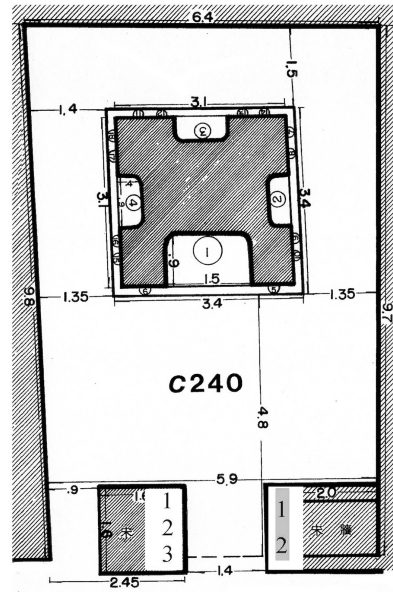


圖8 第260窟見取圖

『莫高窟形』2, 97, 156, 165, 191, 195 頁をもとに作圖 (關係する供養人像のみ示す)。  
 1, 2, 3 … : 男性供養人像。 1, 2, 3 … : 女性供養人像。  
 ⊕ : 男性從者 ⊕ : 女性侍女。記號の後の數字は從者・侍女像の人數を示す。  
 人數不明の場合は「?」で示す。

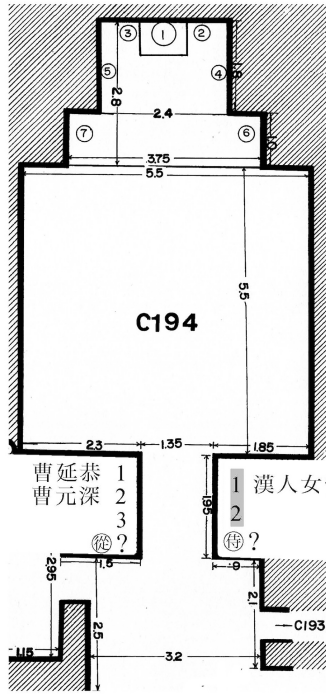


圖9 第397窟見取圖

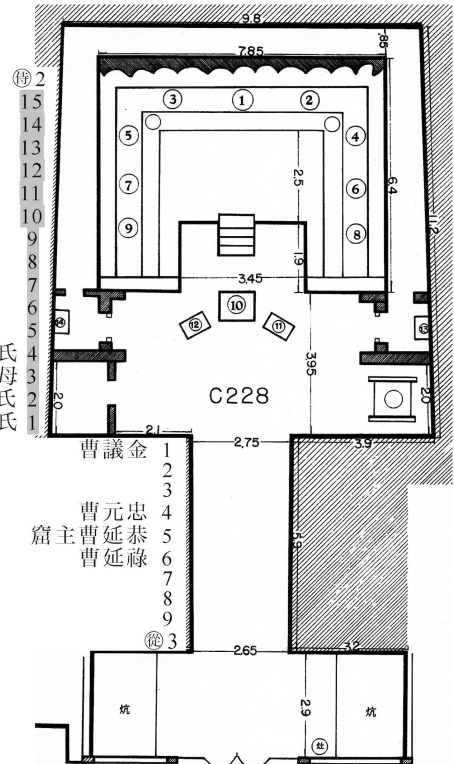


圖10 第454窟見取圖

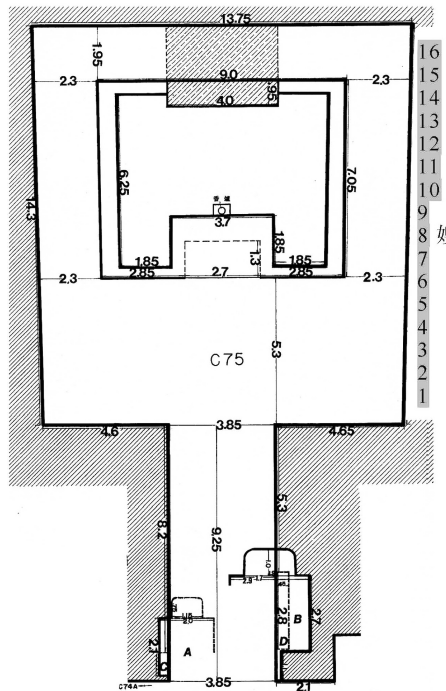


圖11 第61窟見取圖

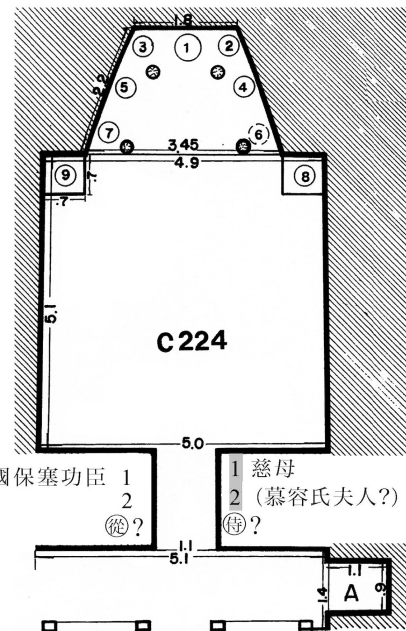


圖13 第444窟見取圖

窟主清河郡夫人慕容氏  
慈母  
故慈母太原郡夫人閻氏  
姑譙郡夫人曹氏

『莫高窟形』2, 64, 127, 145, 148 頁をもとに作圖 (關係する供養人像のみ示す)。

(作者は東京女子大學現代教養學部准教授)